

結論の述べ方の指導法についての試案 —「以上のことから」の機能に注目して—

櫻井芽衣子

日本語学的観点を踏まえ、接続表現「以上のことから」を用いた結論の述べ方を指導する際の試案を述べる。

「以上のことから」は、俵山雄司(2007)「「このように」の意味と用法——談話をまとめる機能に着目して——」(『日本語文法 7-2』)によって、前件から導かれた判断などを後件で述べる、まとめの接続表現とされる。伊藤光史(2014)「接続詞分類の上位概念:「したがって」「つまり」「このように」を通した一考察」(『日本語・日本文化研究 24』大阪大学)は、接続詞「したがって」「つまり」はそれぞれ順接、換言という異なるラベルが付けられることが多いが、前件を前提として後件で判断を下すという共通性があるとする。伊藤(2014)が述べる「判断」は、換言可能な多くの語句の中から当該表現を選択した、ということも含む。『現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下 BCCWJ)』から採取した用例より、「以上のことから」もまた伊藤(2014)が対象とする接続詞と同様に、順接(日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 7』くろしお出版)では確定条件)も換言も表すことができ、前件を前提として後件で判断を述べるものであるといえる。

順接・換言を表すことができる「以上のことから」の機能に注目して、「以上のことから A ので B。」という結論の述べ方を提案する。A は前件を一般化した内容であり、B は A に起因する。A は換言、B は順接の用法によって述べられる事柄である。BCCWJ から得た用例にも、この形式でまとめられているものが見られた。前提となる前件を元に広く判断を述べるものであるという「以上のことから」の機能により、このような述べ方ができると考えられる。あらゆる文章においてこの形式で結論が述べられるわけではないが、前件を一般化して結論の前に述べることで、読み手にとって論理展開が掴みやすくなったり、書き手自身も記述の過不足や誤りに気付きやすくなったりするという利点を得られる。また、一般化という認識の枠組みは文章作成技術だけでなく読解力の向上にも繋がる可能性がある。